

1. 試験実施場所の選定

試験は、各資材とも在来・バーレー種と黄色種産地各1カ所ずつ、計2カ所以上を原則とするが、試験依頼者が指定する場合には、地域限定で実施する。試験実施機関は、前年11月のヒアリング後の受託会議において資器材ごとに決定するので、各試験実施機関は、資材の特性等に応じ試験委託農家、苗床、ほ地等の選定を行う。なお、資材によっては地域や土質等を指定する場合がある。

2. 試験資器材の準備

基本的に供試資材および慣行法で使用しない資材については、試験依頼者が準備し各試験地に送付する。各試験依頼者との試験の詳細、準備等の調整については、研究機関、各原料本部が試験目的、内容、実施時期等に応じ、時期を失しないよう早めに連絡し対応する。

3. 試験規模

試験区は、原則として対照区（慣行区）と試験区の各1水準ずつとする。各区の試験面積は、試験計画書によるが、特に指定がない場合には以下を参考に設定する。

1) 苗床資材

- (1) 親床：各区とも同数の苗箱をもって試験面積とする。
- (2) 子床：各区とも100株以上となるよう試験面積を設定する。本畑初期生育まで観察するものについては、各区とも本畑面積として最低0.1a以上は確保する。

2) 本畑資材

品質・収量を調査するため、反復を含め各区とも3.0aを基本とする。

4. 試験方法

以下の要領に基づいて行い、試験計画書および報告様式、同記入要領を参考に、抜けがないよう試験を実施する。

1) 供試品種

供試品種は、試験計画書により指定する。なお、必要により別途種子を送付する。

2) 処理方法

供試資材の処理方法は、試験計画書および試験依頼者作成のマニュアルに従って適正に処理する。

3) 親床用肥料・土壌改良剤

(1) 発芽率調査（参考編参照）

親床用資材については発芽試験を、各区とも100粒以上で実施する。

(2) 仮植苗適苗率調査

それぞれの区の仮植適期に、各区とも100株以上について目視により仮植の適否調査を行う。

※同一資材で引き続き子床試験を行う場合には、対照区の苗を子床試験に供試する。

4) 子床用肥料・土壌改良剤

(1) 生育調査 (参考編参照, t 検定実施)

① 移植苗

a) 調査株数

- ・生育調査は各区とも30個体以上調査する。

b) 調査時期および調査株の選定

- ・調査株は、複数の育苗ポットから平均的なものを選ぶ。
- ・調査時期は、対照区の移植適期に各区とも同一日に実施する。

② 大土寄せ相当時 (移植40～45日後)

- ・各区とも20個体以上について、同一日に生育調査を行う。

(2) 移植苗の乾物重調査

同一日に、各区とも20個体以上を洗浄後、根、茎、葉の3区分に分離・乾燥し、乾物重を測定する。

(3) 移植苗の適否調査

それぞれの区の移植適期に、各区とも100株以上について目視により調査する。使用可能苗については、適苗、大苗、小苗に分けて調査する。

5) 本畑用肥料・土壌改良剤

(1) 生育調査 (参考編参照, t 検定実施)

① 調査株数

処理効果を正確に判断し、適正な評価をするため、生育調査は各区とも20株以上調査する。

慣 行	全体 (母集団)	処 理 区	全体 (母集団)
	………… 10株以上		………… 10株以上
	………… 10株以上		………… 10株以上
	(調査株=試料) 20株以上		(調査株=試料) 20株以上

② 調査株の選定

- 調査株を選定する場合は、ほ地全体をよく観察し平均的な畦を選ぶ。できれば2畦程度選定し、反復調査するのがよい。
- 初期生育調査株と心止期の調査株は必ずしも一致しなくてよい。
- 成熟状況調査は、心止期と心止4週間後(パーレー種は3週間)の比較を行うので、調査株は一致する必要がある。このため、心止め期の調査では、調査予定本数より多めに選定する。

※調査は全個体について実施不可能なため、平均的な個体を選び、その平均値で判断する。

(この平均値は、母集団を推定するものであるが、母集団そのものではない)

※選定した試料は通常均一ではなくバラツキがあり、その程度も異なる。従って単なる平均値では母集団全体を正確に評価できない場合がある。また、試料平均値には誤差も含まれているので、これらを考慮して処理効果を評価する必要がある。

1 肥料・土壌改良剤 試験実施要領

(2) 表記方法

①有意差検定（5 %水準で有意差が認められたら1 %水準でも検定する）

t 検定……試料平均値が母集団にも同じことが言えるかどうかを判定し、処理区と慣行区の差は誤差を排除して検討した場合にも差があるかどうかを判定する。

②有意差検定方法

有意差検定（t 検定）については、参考編（「Microsoft Excel」による有意差検定の分析手順 p参-4）を参考に実施する。

(3) 品質収量調査

本畑用資材については、区分収穫や貯蔵を行い、品質と収量調査を実施する。調査は、買入時でなく庭先とし、報告様式に基づいて行う。

5. その他調査上の留意事項

1) コメントは、処理後の調査結果から行う。

例) 液肥で心止5日前処理の場合、初期生育調査結果についてコメントする必要はない。

2) 資材によっては、調査事項や項目が付加される場合があるので専門委員の指示に従い実施する。

※本畑で葉面に散布処理する資材については、官能検査（2例）を実施する。

3) 不明な点については、肥料・土壌改良剤担当の専門委員に相談する。

6. 試験成績書作成上の留意事項

1) 報告様式中の『斜体』で記載された文章・数値は、すべて記入例であるので、参考にして記入する。

2) 提出する試験成績書の文字フォントは、すべて『明朝体』とすること。

3) 表中の数値は、すべて『半角』で記入する。

4) 表外の文章等において、カタカナで記入する場合は、すべて『全角カタカナ』で記入する。

- 1 試験対象名^イ 肥効（苗床）
- 2 供試器材名^ハ ○△苗床肥料 （日本産業）
- 3 試験実施場所^ニ 所内苗床（親床・子床）
- 4 試験方法
- 1) 供試品種^ホ 第2黄色種 エムシー1号

[親床]

- 2) 試験区別および供試面積^ヘ
- | | | | |
|-----|--------|--------------------|----------------------|
| 1 区 | 対照（慣行） | 1.0 m ² | |
| 2 区 | ○△苗床肥料 | 1.0 m ² | 計 2.0 m ² |

- 3) 処理方法^ト
慣行育苗用土に所定の割合で（窒素成分を慣行と揃え）配合した。

- 4) 育苗用土^チ

区別	資材名	原材料	肥料成分組成等
1 区	□×培土（メーカー名）	ピートモス等	窒素300mg/L, リン酸900mg/L, 加里350mg/L
2 区	○△苗床肥料（日本産業）	-	-

- 5) 育苗方法^リ

[子床]

- 2) 試験区別および供試面積^ヘ
- | | | | |
|-----|--------|--------------------|----------------------|
| 1 区 | 対照（慣行） | 2.0 m ² | |
| 2 区 | ○△苗床肥料 | 2.0 m ² | 計 4.0 m ² |

- 3) 処理方法^ト
慣行育苗用土に所定の割合で（窒素成分を慣行と揃え）配合した。

- 4) 育苗用土^チ

区別	資材名	原材料	肥料成分組成等
1 区	□×培土（メーカー名）	ピートモス等	窒素300mg/L, リン酸900mg/L, 加里350mg/L
2 区	○△苗床肥料（日本産業）	-	-

- 5) 育苗方法^リ

- 5 試験成績

[親床]

- 1) 苗床期節^ス

区別	播種	発芽始 ^ル	間引	仮植	親床日数
	月日	月日	月日	月日	日
1 区	2. 1	2. 7	2. 11	2. 24	23
2 区	2. 1	2. 7	2. 11	2. 24	23

- イ 試験計画書の試験対象名を記入する。ヘッダーにも記入する。
- ロ ヘッダーに記入する。
- ハ 試験計画書の供試器材名（カッコの中はメーカー名）を記入する。ヘッダーには器材名のみ記入する。
- ニ 所内試験で親床と子床両方の試験を行う場合には“所内苗床（親床・子床）”，親床のみの場合は“所内苗床（親床）”，子床のみの場合は“所内苗床（子床）”と記入する。
産地試験の場合は下記のとおりとする。
○○原料本部
試験委託農家（または試験実施場所）の住所（市町村名まで）
- ホ ”第2黄色種 エムシー1号”のように試験計画書の品種名を記入する。
- ヘ 面積は下記の通り，記入する。
例) 2)試験区別および供試面積
- | | | |
|----|--------|--------------------|
| 1区 | 対照（慣行） | 2.0 m ² |
| 2区 | ○△苗床肥料 | 2.0 m ² |
| | 計 | 4.0 m ² |
- ト 試験実施要領の処理方法に基づいて記入する。
例) 慣行育苗用土に所定の割合で配合した。
- チ 供試した育苗用土について、原材料や肥料成分組成等についても可能な限り記載する。
- リ 育苗方法を，育苗ハウスの形式，使用ポットの種類，温度管理，追肥の方法等について管理方法を記入する。
- ヌ 表中の月日は略して ”2.15”（2月15日の場合）のように記入する。
- ル 幼根が伸び、カギ型となった時から発芽とみなす。

2) 発芽率

区別	発 芽 率		発芽勢 ^イ
	10日後	14日後	
1 区	% 93.0	% 93.0	% 100
2 区	% 96.5	% 96.5	% 100

3) 仮植適苗率

区別	調 査 ^ロ	使用可能苗 ^ハ	備 考 ^ニ
	月日	%	
1 区	2. 26	92	小苗 : 4.5 % 欠株 : 3.5 % (腰折病)
2 区	2. 24	96	小苗 : 2.0 % (発芽遅れ) 欠株 : 2.0 %

[子床]

1) 苗床期節^ホ

区別	播種	仮植	移植	播種～仮植	仮植～移植
	月日	月日	月日	日	日
1 区	2. 1	2. 26	3. 18	25	20
2 区	2. 1	2. 24	3. 17	23	21

2) 移植苗の生育

区別	調 査 ^ヘ	外観葉数 ^ト	しぼり丈 ^ト	最 大 葉			葉 色
				葉 長 ^ト	葉 幅 ^ト	位 置 ^ト	
1 区	月日 3. 17	枚 10.2	cm 12.0	cm 11.4	cm 6.3	枚目 7.1	7.0
2 区		枚 10.3	cm ⁺ 13.0	cm ⁺ 12.3	cm 6.7	枚目 7.4	6.6

注 1) 外観葉数は子葉から数えた。葉色はカラスケール値。

注 2) “+”, “-” 印は、慣行区に対する大小関係を示し、5 %水準で有意差があることを示す。^チ

3) 移植苗の乾物重 (1 株当たり) ^リ

区別	調 査 ^ヘ	乾 物 重			計	R/T 率
		葉 部	茎 部	根 部		
1 区	月日 3. 17	g 0.234	g 0.016	g 0.048	g 0.298	% 19.2
2 区		g 0.258	g 0.021	g 0.041	g 0.320	% 14.7

4) 移植苗の適否^ス

区別	調 査 ^ル	使用可能苗			使用不能苗	生 育 概 況 ^ヲ
		適 苗	小 苗	大 苗		
1 区	月日 3. 18	% 90.5	% 8.0	% 1.0	% 0.5	
2 区	3. 17	% 92.0	% 3.0	% 5.0	% 0.0	

イ 発芽勢 = $\frac{10\text{日後の発芽率}}{14\text{日後の発芽率}} \times 100$ なお、発芽試験方法は p 参-2を参照すること。

ロ 仮植苗の適否調査は、各区の仮植適期に合わせて調査する。

ハ 使用可能苗の判定は肉眼観察で行う。

ニ 小苗および欠株の割合（％）と、その主な原因が特定できる場合は、病害名等を記入する。

ホ 区毎の苗床期節および親床、子床期間を記入する。

ヘ 移植苗の生育調査および乾物重調査は、各区同一月日に調査する。
 なお、R／T率は「根部／（葉部＋茎部）」「Root Top ratio」の略である。

ト 各区とも30個体以上を生育調査し、平均値と有意差検定結果を例示に基づき記入する。
 ※有意差検定（t検定）の結果、5％水準で有意差が認められた場合：「⁺」、「⁻」を右上につける。1％水準で有意差が認められた場合：「⁺⁺」、「⁻⁻」を右上につける。
 例) $\frac{\text{しぼり丈}}{12.3^+}$ $\frac{\text{外観葉数}}{10.3^-}$

チ 生育調査データの表示方法について、注2)として記入する。
 ※有意差検定（t検定）で有意差が認められた場合の注書例
 注2)「⁺」、「⁻」印は、慣行区に対する大小関係を示し、5％水準で有意差があることを示す。
 ※有意差が認められなかった場合
 注2) 有意差検定を実施したが、すべての値に有意差は認められなかった。

リ 生育調査後、洗浄、熱風乾燥し、葉、茎、根の乾物重を測定し記入する。
 なお、専門委員の判断により、この項目を省略することがあるので留意する。

ヌ 移植苗の適否の判定は肉眼観察で行うが、対照区(慣行)の平均的な大きさのものを適苗とし、使用可能苗の大小の割合をそれぞれ調査し区分する。
 なお、調査には各区 100個体を供試する。

ル 移植苗の適否調査については、各区の移植適期に合わせて調査する。

ヲ 対照区(慣行)と試験区の生育状況を比較し記入する。

5) 本畑初期の生育（移植42日後、4月29日）^イ

区別	草丈 ^ロ	地上葉数 ^ロ	最 大 葉				ハ 齊否
			葉長 ^ロ	葉幅 ^ロ	位置 ^ロ	葉色 ^ロ	
1 区	cm 14.5	枚 17.8	cm 45.8	cm 22.3	枚目 5.3	7.5	齊
2 区	⁺ 15.6	⁻ 16.9	⁻ 43.4	21.8	5.6	7.5	齊

注1) 最大葉の位置は下からの地上葉位で示し、葉色はカレースケール値。

注2) ⁺, ⁻印は、慣行区に対する大小関係を示し、5%水準で有意差があることを示す。

6) その他^ニ6 結果の要約^ホ

イ 大土寄を行う時は、大土寄時に調査し、カッコ内には“大土寄時 4月19日”のように記入する。
大土寄を行わない場合は、移植40～45日後に調査し、その場合には“移植42日後 4月29日”のように記入する。

ロ 各区とも20個体以上を生育調査し、平均値と有意差検定結果を例示に基づき記入する。
※有意差検定（t検定）の結果、5%水準で有意差が認められた場合：[+]、[-]を右上につける。1%水準で有意差が認められた場合：[++]、[--]を右上につける。

例)	<u>草 丈</u>	<u>地上葉数</u>
	15.6+	16.5-

ハ 斉、やや否、否の別を記入する。

ニ 試験資器材別に試験計画書で指示があった場合、その項目を調査し記入する。

ホ 親床、子床両方ある場合は、その苗床ステージごとに区分し、そのステージごとに供試資器材による違いが見られたか否か等を試験結果に基づき客観的に記入する。
特別の理由（病害の多発）があった場合は、考察を加える。

肥効（本畑）^イ
 ○×肥料^ハ
 試験担当機関名^ロ

- 1 試験対象名^イ 肥 効（本畑）
- 2 供試器材名^ハ ○×肥料（日本産業）
- 3 試験実施場所^ニ ○○原料本部
 ○○県○○郡○○町
- 4 試験方法
- 1) 供試品種^ホ 第1黄色種 コーカ-319

2) 試験区別および供試面積^ヘ

1 区 対照（慣行）	3.0 a	
2 区 ○×肥料施用	3.0 a	計 6.0 a

3) 試験地土壌の性状

地 目 ^ト	土壌種類 ^チ	土性 ^リ	耕土の深さ	排水の良否 ^ヌ	肥沃度 ^ル	腐植の含量 ^ヲ
畑・緩傾斜	黄色土	壤 土	25 ^{cm}	普 通	やや肥沃	普 通

4) 施肥設計

(1) 施肥設計（10a当たり）^ワ

区別	肥料名	施肥量	施肥法		施肥成分量			肥料成分比		
			基肥	追肥	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
1 区	堆肥	kg 1,500	kg 1,500	kg	kg	kg	kg	%	%	%
	有機化成	160	160		9.6	19.2	24.0	6.0	12.0	15.0
	油粕	40	40		2.1	0.8	0.4	5.3	2.0	1.0
	過石	40	40			6.8			17.0	
	合成草木灰	60	60				8.4			14.0
	計	—	—	—	11.7	26.8	32.8	—	—	—
2 区	堆肥	1,500	1,500		11.7	23.4	35.1	6.0	12.0	18.0
	○×肥料	195	195			3.4			17.0	
	過石	20	20							
	計	—	—	—	11.7	26.8	35.1	—	—	—

注) 対照区の有機化成は、○×社製○×肥料637を使用した。^カ

5) 処理法^コ

2区は、○×肥料を1区の窒素量に揃え、基肥で施した。

3 本畑用 肥料・土壌改良剤	記 入 要 領
----------------	---------

- イ 試験計画書の試験対象名を記入する。ヘッダーにも記入する。
- ロ ヘッダーに記入する。
- ハ 試験計画書の供試器材名（カッコの中はメーカー名）を記入する。ヘッダーには器材名のみ記入する。
- ニ 所内の場合は“所内本畑”と記入する。産地試験の場合は下記のとおりとする。
 ○○原料本部
 試験委託農家（または試験実施場所）の住所（市町村名まで）
- ホ 「第1黄色種 コーকার319」のように試験計画書の品種名を記入する。
- ヘ 試験区別および供試面積を記入する。（産地試験の場合は1区当たり3a）
 なお、反復試験を実施した場合は、以下のように記入する。
 例) 2) 試験区別および供試面積
- | | |
|-----------|---------------------|
| 1区 対照（慣行） | 3.0 a |
| 2区 ○×肥料施用 | 3.0 a |
| 計 | 6.0 a （各区 1.5a 2反復） |
- ト 田または畑，平坦または傾斜の別を記入する。
 例) 畑，緩傾斜
- チ 砂丘未熟地，腐植質黒ボク土，淡色黒ボク土（赤ボク，赤ホヤ，シラス等），赤色土，黄色土，灰色低地土，褐色森林土等の具体的な名前を記入する。
- リ 砂土，砂壤土，壤土，埴壤土，埴土，礫質土の別を記入する。
- ヌ 良，普通，不良の別を記入する。
- ル 肥沃，中庸，瘦の別を記入する。
- ヲ 少ない，普通，富む，すこぶる富むの別を記入する。
- ワ 施肥した肥料ごとに，施肥量，施肥法，施肥成分量，肥料成分比を記入する。
 肥効試験の場合，試験区の施肥量については，成分が慣行と同量になるよう設定する。
- カ 対照資材の製造業者名および製品名を注書する。なお，自給資材については記載の必要はない。
- ヨ 試験実施要領の処理方法に基づいて記載する。なお，成分量を保証する微量要素肥料等では，専門委員の指示に従い保証成分，規格等を記載することがある。

5 試験成績

1) 栽培法ならびに栽培期間中の気象概況

(1) 栽培法

タバコの 連作年数	土壌消毒		被 覆		施肥 ^ホ 方法	前 作		栽植本数 ^ト (畦株間)
	時 期 ^イ	方 法 ^ロ	形 式 ^ハ	期 間 ^ニ		作物名	施肥量 ^ヘ	
年 5	クロル [°] クリン 秋	全面 20 ^リ g/10a	折衷マルチ (透明)	大土寄 まで	条肥	なし	kg/10a	本/10a 2,070 (115×42cm)

(2) 耕作期節^チ

区別	施肥		移植	土寄	開花	心止	移植～心止 までの日数	葉分別収穫	幹刈 ^リ	心止～収穫終 了までの日数
	基肥	追肥								
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	日	月日	月日	日
1 区	2. 26	—	3. 11	—	5. 22	5. 25	75	下葉 5. 30 中葉 6. 14 合葉 7. 1 本葉 7. 15 上葉 7. 15		51
2 区	2. 26	—	3. 11	—	5. 22	5. 25	75	下葉 5. 30 中葉 6. 14 合葉 7. 1 本葉 7. 15 上葉 7. 15		51

(3) 栽培期間中の気象概況 (〇〇市) ^ス

期 間		気 温	最高気温	最低気温	日照時間	降水量
耕作期節	月日～月日					
初期生育期 (移植～大土寄)		℃	℃	℃	hr	mm
	3. 11～3. 20 ^ル	13. 4 ^ヅ	18. 7 ^ヅ	8. 2 ^ヅ	6. 0 ^ヅ	23. 0 ^ヅ
	3. 21～3. 31	12. 4	16. 1	7. 9	2. 5	38. 0
	4. 1～4. 10	16. 0	21. 5	10. 9	6. 3	69. 0
	4. 11～4. 19	19. 2	26. 5	12. 5	8. 6	0
	計	603. 2 ^ヅ	817. 6 ^ヅ	390. 4 ^ヅ	227. 9 ^ヅ	130. 0 ^ヅ
最大生長期 (大土寄～心止)	平 均	15. 1 ^ヅ	20. 4 ^ヅ	9. 8 ^ヅ	5. 7 ^ヅ	—
	4. 20～4. 30	14. 7	18. 9	11. 1	1. 8	0
	ル	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	リ
成 熟 期 (心止～収穫終了)	計	カ	カ	カ	カ	カ
	平 均	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	—
	ル	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	リ

注) 降水量は期間中の合計値を, その他は平均値を示す。

3 本畑用 肥料・土壌改良剤	記 入 要 領
----------------	---------

イ 薬剤名と、秋消毒、春消毒の別を記入する。

例) クロビ[®] クリン 秋

ロ 全面消毒、部分消毒の別、使用量を記入する。

例) 全面 20 $\frac{g}{L}$ /10a

ハ 貼付トンネル、改良マルチ、折衷マルチ、トンネル、改良トンネル、トンネルマルチ同時スタート、トンネルマルチリレー、裸地、その他（具体的に記入）の別と、マルチフィルムの種類（透明、ハーフシルバー、白黒配色等）をカッコ書きで記入する。

（マルチ形式については、葉たばこ研究第74号 p32～33を参照のこと）

ニ 大土寄まで、心止まで、収穫終了までの別を記入する。

ホ 条肥、全層施肥、その他（具体的に記入）の別を記入する。

ヘ 3成分量を記入する。

例) N 6.0 P₂O₅ 6.0 K₂O 6.0

ト 栽植本数および畦株間距離を記入する。

チ 耕作期節および期間を記入する。

リ 幹刈りした場合は“幹刈”とし、幹刈月日を記入する。幹刈りをしていない場合は、この欄は不要。

ヌ 気象データを観測したもよりの気象観測所のある市町村名を記入する。

なお観測データが取れない場合は、初期生育期（移植～大土寄）、最大生長期（大土寄～心止）、成熟期（心止～収穫終了）ごとに、温度、降雨、日照等の概況を簡記する。

ル 旬別で記入するが、各期間の始まりと終わりは耕作期節に合わせる。大土寄当日は最大生長期に、心止当日は成熟期に含ませる。月日は “5. 11～5. 20”（5月11日～5月20日の場合）と記入する。

ヲ 気温、最高気温、最低気温、日照時間は期間中の平均値を記入する。

ワ 降水量は、期間中の合計値で示す。

カ 期間中の合計値を記入する。

ヨ “カ”を期間中の日数で除した平均値を記入する。

2) 生育調査

(1) 初期生育 (移植42日後 4月21日) ^イ

区別	草丈 ^ロ	最 大 葉			齊否 ^チ
		葉長 ^ロ	葉幅 ^ロ	葉色 ^{ロト}	
1 区	cm 14.5	cm 42.8	cm 20.8	7.5	齊
2 区	+ 15.6	- 40.4	20.8	7.5	齊

注1) 葉色はカースケール値。

注2) ⁺, ⁻印は、慣行区に対する大小関係を示し、5%水準で有意差があることを示す。^ハ(2) 心止期の生育 (5月25日) ^ニ

区別	草丈 ^ロ	収穫 ^ロ 葉数	最 大 葉			樹 型 ^ホ	樹勢 ^ヘ	齊否 ^チ
			葉長 ^ロ	葉幅 ^ロ	葉色 ^{ロト}			
1 区	cm 119.3	枚 17.2	cm 65.5	cm 24.1	7.0	シンダー型	普通	齊
2 区	+ 120.5	- 17.0	+ 67.3	26.7	6.5	シンダー型	普通	齊

注1) ⁺, ⁻印は、慣行区に対する大小関係を示し、5%水準で有意差があることを示す。^ハ3) 作柄概況^{リヌ}

区別	項目	コ メ ン ト
1 区	初期～開花期	
	成熟期 (上位葉の展開と色落)	
	病虫害の種類と程度、その他	
	見込み収量	〇〇kg/10a (△月△日時点)
2 区	初期～開花期	
	成熟期 (上位葉の展開と色落)	
	病虫害の種類と程度、その他	
	見込み収量	〇〇kg/10a (△月△日時点)

4) その他^ル

3 本畑用 肥料・土壌改良剤	記 入 要 領
----------------	---------

イ 大土寄を行う時は、大土寄時に調査し、カッコ内には“大土寄時 4月19日”のように記入する。
大土寄を行わない場合は、移植 4 0～4 5 日後に調査し、その場合には“移植42日後 4月21日”のように記入する。

ロ 各区とも20個体以上を生育調査し、平均値と有意差検定結果を例示に基づき記入する。
※有意差検定（t 検定）の結果、5 %水準で有意差が認められた場合：[+]，[-] を右上につける。1 %水準で有意差が認められた場合：[++]，[--] を右上につける。

例)	草 丈	地上葉数
	15.6 ⁺	16.5 ⁻

ハ 生育調査データの表示方法について、注2) として記入する。
※有意差検定（t 検定）で有意差が認められた場合の注書例
注2) “+”, “-” 印は、慣行区に対する大小関係を示し、5 %水準で有意差があることを示す。
※有意差が認められなかった場合
注2) 有意差検定を実施したが、すべての値に有意差は認められなかった。

ニ 調査月日を記入する。
区によって調査日が異なる場合は、“(1 区 5月20日, 2 区 5月22日)”のように記入する。

ホ ピラミッド型、シリンダー型等の別を記入する。

ヘ 旺盛、やや旺盛、普通、やや弱、弱の別を記入する。

ト 最大葉について濃い、やや濃、普通、やや淡、淡いの別またはカラスケール値の平均を記入する。

チ 斉、やや否、否の別を記入する。

リ 気象状況を踏まえて作柄概況を簡記する。なお、コメントの記入にあたっては生育調査データ（草丈、最大葉の大きさ、葉色の変化、上位葉の展開）と矛盾しないように関連性を十分考慮して記入する。
病虫害の発生状況を記入する。
見込み収量については、調査時点の見込み収量を記入する。
例) 見込み収量：270kg/10a (6月30日時点)

ヌ 対照区（慣行）との比較を踏まえ記述する。
例) 1 区と比較し初期生育は・・・

ル 試験計画書で指示された事項（作柄写真、大土寄相当時・収穫終了時根部調査および写真、各種病害発生状況調査等）について各項目ごとに調査し記入する。なお、写真については、別紙とし添付する。
特にない場合は、「特になし」と記入する。

5) 品質収量¹

(1) 買入成績

区別	葉分	葉分タイプ別千分比							1 kg 当たり り代金	10 a 当たり	
		A	B	C	P	S	M	計		収 量	代 金
1 区	下葉	15	—	—				15	円 1,440	kg 4.0	円 5,760
	中葉	136	55	22				213	1,733	57.9	100,341
	合葉	135	100	30	—	—	—	265	2,107	71.6	150,861
	本葉	157	140	12				309	2,128	83.6	176,229
	上葉	186	12	—				198	1,887	53.8	101,521
	計	629	307	64	—	—	—	1,000	(100) [□] 1,974	(100) [□] 270.9	534,712
2 区	下葉	14	—	—				14	円 1,440	kg 3.9	円 5,616
	中葉	42	100	23				165	1,557	46.2	71,933
	合葉	111	125	60	—	—	—	296	2,011	82.8	166,511
	本葉	188	113	21				322	2,146	90.3	193,784
	上葉	179	15	9				203	1,839	57.0	104,828
	計	534	353	113	—	—	—	1,000	(98.1) [□] 1,937	(103.4) [□] 280.2	542,667

(2) 乾葉の外観性状

区別	葉 分		乾 葉 の 外 観 性 状 ^ハ
1 区	中葉系	下葉	熟度中庸, レモン, 組織ややもろめ, 中肉
		中葉	熟度やや未熟, レモン, 組織ややもろめ, やや薄肉
		合葉	熟度やや未熟, レモン, 組織中庸, 中肉
	本葉系	本葉	熟度中庸, 淡オレンジ, 組織中庸, 中肉
		上葉	熟度中庸, 淡オレンジ, 組織中庸, 中肉から厚肉
2 区	中葉系	下葉	ニ
		中葉	ニ
		合葉	ニ
	本葉系	本葉	ニ
		上葉	ニ

6) その他^ホ6 結果の要約^ヘ

- イ 品質収量は、庭先で調査する。
 なお、中間成績報告の時点で、品質収量調査が未了の場合は、この表は不要となるので“調査中”と記入して報告し、最終成績報告の時に調査結果を記入して報告する。
- ロ 対照区（慣行）を100として指数を算出し、カッコ書きで記入する。（四捨五入して小数第1位止）
- ハ 熟度、色沢、組織、葉肉について短縮形の表現を避けて記入する。
 熟度については、中熟は熟度中庸、熟良は熟度良好とし、色沢では淡オレではなく、淡オレンジと記入する。組織では、組織中庸、やや粗め、充不は充実不足と記入し、葉肉は、中肉、薄肉、厚肉と記入する。
 なお、もろめ、むれ、くすみ等については、『ひらがな』で記入する。
- ニ 試験区の外観性状については、慣行区と比較したコメントを記載する。
 例) 1区と比較し熟度は・・・
- ホ 資材の取扱性について特に気づいた点があれば記入する。
 また、専門委員から指示された調査がある場合には、それについても記入する。
- ヘ 処理による違いが観られたか否か等を試験結果に基づき客観的に記入する。
 特別の理由（病害の多発、災害の発生等）があった場合は、考察を加える。

品質収量の区間差の有無の判断は、1kg当たり代金および10a当たり収量の慣行を100とした指数を算出し、次の基準を基にして判断する。

±2.5%未満	……………	差なし
±2.5～5.0%未満	……………	やや差あり……やや優る（劣る）
±5.0～7.5%未満	……………	差あり……………優る（劣る）
±7.5%以上	……………	大差あり……………かなり優る（劣る）

例) ○×肥料は慣行肥料に比べ、生育の差はなかったが、成熟期の色落ちは若干早かった。品質収量では、品質は差がなかったが、収量はやや優った。